

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：20102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520683

研究課題名(和文) 第二言語の発達過程および処理可能性による中国語の文法項目導入順序の基準構築

研究課題名(英文) Restructuring of the order and arrangement of Chinese grammatical items: A perspective of developmental process and processing ability in SLA

研究代表者

鈴木 慶夏 (Suzuki, Keika)

釧路公立大学・経済学部・准教授

研究者番号：80404797

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：第二言語としての中国語教育の際に、どのような文法項目をどのような順序で導入するのが適切であるかについて、将来的に利用できる根拠を中間言語の発達過程という見地から示すことができた。経時的な調査を行い明らかにしたのは、主として、(1)学習者の中間言語における場所を表す前置詞句の統語構造と統語配置、(2)プロトコル・レポートに反映された学習者の中間言語を構築する文法体系等である。これらの分析結果にもとづき、学習者の文法処理能力の観点から、学習者の中間言語が有する特徴および中国語の言語類型論上の特徴との相関関係について、学会誌・学術誌、国内外の学会・研究会で研究成果を発表することができた。

研究成果の概要(英文)：The primary purpose of this study is to present evidences to verify ordering and organizing the sequences of "What grammatical items or linguistic forms should be taught at different stages of development of learning L2 Chinese." By monitoring the alteration of interlanguage forms produced by Japanese speakers, remarkable achievements in the study are: (1) the syntactic forms and positioning of the prepositional phrase which indicates location of action; (2) Learners' grammar system which is directly mirrored to their protocol reports. Based on empirical research, many papers were presented to academy and treatises were published in academic journals.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：中国語 第二言語 中間言語 処理可能性 文法項目導入順序

1. 研究開始当初の背景

(1) これまで中国語教育では、「どのような文法項目(文法構文を含む)をどのような順序で導入すべきか」を議論するための言語事実や方法論の提示が未だ得られていない状況であった。そのため、文法項目の導入順序を検討する際には、学習者の到達レベルを考慮しなければならないという、共通の理念を有しながらも、①使用頻度の高いものから導入する、②内部構造がシンプルなものから導入する、③既習の文法事項を即時応用できるものから導入する等、その導入順序の基準に関しては、検証可能な根拠が示されず、常に議論が紛糾していた。

(2) また、教育現場への応用を念頭においた主張には、次の不備があった。①第二言語習得研究者は、中国語学の研究成果をほとんど運用しておらず、目標言語・目標形式が有する言語学的特徴に対する考察が不足し、②中国語学の研究者は第二言語習得研究の成果をほとんど運用しておらず、学習者の内部で起こる言語処理およびその発達過程に対する考察が不足しており、③中国語教育に特化した研究は、研究者自らが対象とする学習者の(動機や意欲をふくむ)特質に応じて独自のノウハウを駆使した末に教育効果があったとされるアドホックな教授経験によるものが多く、汎用性に欠けるきらいがあり、検証も不可能であった。

2. 研究の目的

そこで、本研究は、中国語学・第二言語習得研究・中国語教育それぞれの研究領域の狭間に存在する空白部に入り込み、①学習者言語の各発達段階に適用が可能な「教育的汎用性」、および、第二言語の発達過程の体系的な把握が可能な「検証可能性」を担保し得る言語事実、すなわち、学習者の産出する中間言語形式を言語事実として提示することを目指し、②第二言語の各発達段階における言語知識の処理可能性という見地から、中国語の文法項目導入順序の基準構築に資する証拠を示そうとした。

3. 研究の方法

(1) 本研究課題では、様々な学習者調査を実施したが、これらの調査は、従来中国語教育でなされていた量的・横断的な視点によるものではなく、質的・縦断的(すなわち経時的)な調査である。上の「研究の目的」で記したとおり、本研究が「第二言語の発達過程における文法処理能力」を追求しようとする以上、各発達段階における中間言語の変容を捉えなければならないからである。つまり、正答率や誤答率をデータとして導き出すのではなく、誤答と判断される非適格な言語形式が学習時間の経過とともにどのように変容するのか(どのように進歩するのか)、質的変化を扱うのである。

実際にとった手順は、次のとおりである。
①中国語学習者が筆記および口頭で産出した中間言語を最長2年にわたって複数回収集し、②毎回得られたデータに対し、意味・統語・語用の各側面から構造的な分析を行った。③そうして得られた構造分析を経時的に比較し、学習者の産出した中間言語形式が異なる発達段階でどのような特徴を有するかを分析した。

(2) 分析に際しては、調査結果を中国語学および第二言語習得研究において蓄積された成果と関連づけながら、その原因を考察し、「ある文法項目や文法構文を文レベル処理できるようになるには、その前提条件として、どのような文法知識が必要で、その文法知識をどの階層の文法レベルで処理できるようになる必要があるか」を示すことで、構造面での検証が可能になるようにした。

4. 研究成果

(1) まず、学習者言語の(少なくとも一端)を明らかにするために、学習者が産出した中間言語における「場所をあらわす前置詞句」の統語構造と統語配置について経時的観察にもとづく調査結果を、データ分析とともに、①コミュニケーション・ゴールに到達するための口頭表現の運用にしぼったものを[学会発表 8]で発表した。②これに続けて[学会発表 7]では、学習者の中間言語における筆記による産出結果を記述・整序して発表し、様々な意見やコメントを集約した上で、③[雑誌論文 2, 8]にまとめ、「学習者の文法処理およびその発達段階」「中国語前置詞句の類型論的特徴」「当該の文法項目をめぐる現行の教授順序およびその課題」から考察を加えた。

最大の研究成果は、学習者の中間言語における前置詞句の統語上の配列様式およびそのような統語形式の産出理由は、ある特定の発達段階における過渡的で不可避な統語形式であることを示した点である。そして、このような言語事実と言語類型論・中国語学・第二言語習得研究における研究の蓄積を結びつけ、「文レベルにおける言語知識を処理できるようになるには、その前提条件として、句レベルにおける文法知識が必要で、句レベルの言語知識を処理できるようになるには、語レベルでの処理が実行できる必要がある」ことを実地に示し、従来の通説的見解より説得力のある主張を展開した。

(2) 上記(1)と平行して、「動作が行われる時点」を表す表現形式が、学習者の中間言語において統語上どのように配置されるか、その中間言語形式の変容を経時的に観察し、[雑誌論文 8]で発表後、[学会発表 5, 6]で、国内外の中国語教育研究者に向けて成果発表を行った。これにより、本課題が研究対象とする現象が日本語を第一言語とする中国語学習者だけの問題ではなく、英語や他の言

語を第一言語とする中国語学習者の中間言語とも共通することを示した。この点で、本研究課題は、異なる言語背景を有する中国語学習者が産出する中間言語に存在する普遍性を、海外の中国語教育学界に先駆けて成果発信したことになる。

さらに顕著な成果は、本研究課題での調査結果にもとづく通言語的な認知上の特徴と個別言語としての中国語に固有の特徴を、その相関関係とともに提起したことで、将来的に、中国語学と第二言語習得の各研究領域において議論が集中する諸課題に対し、従来よりも広い視座からの考察を可能にしたことである。この点で、本研究課題は、言語事実_にに依拠するかたちで、学術上の理論と教育的実践を有機的に結びつけることを可能にしたことになる。

(3) 上記(1)(2)で得られた研究結果に対する分析を深化させる過程では、本研究が課題名とする「第二言語の発達過程および処理可能性による中国語の文法項目導入順序の基準構築」を実現するには、①学習者言語の各発達段階における処理能力の他に、②個々の文法指導法、すなわち、文法インストラクションのあり方と、③教育文法における文法項目の属性という要因も大きく関与することが判明した。そのため、上述②③の要因である文法インストラクションと文法項目の性質という観点から、今後、本研究課題のさらなる進展と中国語学・第二言語習得研究・中国語教育学という各研究分野において、実践面での問題解決に資するだけでなく、学術面での理論構築や理論的考察を視野におさめる個別の研究課題を新たに設定し得ることになる。

(4) (3)で今後の研究の必要性が明らかになった文法インストラクションに関しては、[学会発表 1, 2, 3]および[雑誌論文 1, 5]に、現時点で整理可能な状況と課題をまとめ、個別のインストラクションが言語習得に与える影響について記述と分析を開始した。これによって、将来的には、第二言語習得研究において有益な知見を提供する処理可能性理論の理論的枠組みを実際にどう中国語教育に応用できるのか、具体的な方法論を提供し得ることになる。

(5) また、本研究課題は[雑誌論文 3]によって、ある特定の発達段階における学習者の中間言語体系の中で、文法範疇や文法規則がどのように認知されているかを、プロトコル分析によって示した。研究の結果明らかにしたのは、仮に学習者が適格・適切な言語形式を産出したとしても、それは学習者の言語体系によるもので、中国語学研究で抽出された文法範疇や文法規則によるとは限らないという事実である。このことは、今後、学習者にどのようなインストラクションを与えると、

どの文法レベルでどのような処理能力が促進されるかを追究する布石となる。

さらに、[雑誌論文 3]では、筆記によるプロトコル・データを収集分析したことによって、未だ中国語教育では把握できていなかった「ブラックボックスである学習者の頭の中で果たしてどのような文法処理がなされているのか」を、当該論文が分析対象とする文法現象については明示することができた。これにより、今後は、学習者の言語体系における「文法知識の心理的現実性」という観点から、文法項目導入順序の設計方法に対し、学術的・実践的展望を得られるようになると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

1. 鈴木慶夏, 現代漢語疑問代詞前後照応的語法構式—如何理解“誰先回家, 誰就作飯” [Chinese Wh-conditionals as a Grammatical Construction]. 《語言教學與研究》(中国), 查読有, 2014, 印刷中.
2. 鈴木慶夏, 從“運用”到“知識”的語法教學法—基於逆向設計的真實任務[A real performance task by backward design approach: From performance to knowledge]. 『華文教學叢書』(シンガポール), 查読有, 2014, 印刷中.
3. 鈴木慶夏, プロトコル・データからみた学習者の文法体系—教育文法への示唆—. 『中国語教育』第12号, 中国語教育学会, 查読有, 2014, 46-68.
4. 鈴木慶夏, 語言類型學視角下的漢語獨特性對教學語法的啓示 [Pedagogical Implications for Chinese Grammar: A Perspective of Typological Uniqueness of Chinese]. 『第二屆漢語獨特性理論與教學國際研討會論文集』上海外國語大學出版社(中国), 查読有, 2013, 86-91.
5. Suzuki, Keika, CFL teachers' Challenges and Strategies on Chinese wh-conditionals. 《國際漢語教學學術研討會論文集》(中国), 查読有, 2013, 796-804.
6. 鈴木慶夏, 論漢語學習者的語法體系及其類型學特徵, 『語言科學創刊十周年慶典論文集』(中国), 招待論文, 查読無, 2012, 257-262.
7. Suzuki, Keika, The Cause of the Interlanguage Production of “*Wo xuexi Hanyu zai daxue”. 『國際漢語教材的理念與教學實踐研究』(中国), 查読有, 2012, 135-140.
8. 鈴木慶夏, 中間言語の発達過程における“*我學習漢語在學堂” “*我們去七點吧” 『中国語教育』10号, 中国語教育学会, 查読有, 2012, 126-154.

[学会発表] (計 8 件)

1. Suzuki, Keika, Grammatical Affordance in Discourse: An Ecological Approach for Chinese Wh-conditionals. The 3rd International Conference on Chinese as a Second Language Research, University of Parma, Italy. August, 2014.
2. Suzuki, Keika, L2 Learners as Practitioners of Word Order Typology: Syntactic Positioning of Time and Space Categories in L2 Chinese. The 22nd Conference of the International Association of Chinese Linguistics, University of Maryland, United States. May, 2014.
3. Suzuki, Keika, The locative prepositional phrase in L2 Chinese. Implication for TCFL. The 1st International Conference on Teaching Chinese as a Foreign Language. The University of Hongkong, Hongkong. December, 2013.
4. 鈴木慶夏, “誰先来, 誰先喫” 等疑問代詞照応格式的教学法—漢語教師面臨的挑戰与应对策略[CFL Teachers’ Challenges and Strategies on Chinese Wh-conditionals: How to Teach “Shei xian lai, shei xian chi”?]. 第十一届国际汉语教学学术研讨会, 中国, 四川大学, 2013年6月.
5. 鈴木慶夏, 論漢語學習者的語法体系及其類型学特徵, 当代語言科学創新与發展国际學術研討会, 招待講演, 中国, 江蘇師範大学, 2012年10月.
6. Suzuki, Keika, The interlanguage production of “*Women qu qidian ba*” by Japanese-speaking L2 Chinese learners. 第二屆漢語作為第二語言研究国际研討会. 台湾, 台湾師範大学, 2012年8月.
7. 鈴木慶夏, “*我學習漢語在大学” “*我们去七点吧” から見た関連文法項目の学習順序と習得順序. 第61回日本中国語学会全国大会, 松山大学, 2011年10月.
8. 鈴木慶夏, コミュニケーション・ゴールからの逆向き文法学習. 中国語教育学会関西地区研究会, 関西大学, 2011年3月.

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

○取得状況 (計 件)

名称 :

発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木慶夏 (SUZUKI, Keika)
釧路公立大学・経済学部・教授
研究者番号 : 80404797

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :